The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Leo Komischke-Konnerup, Efterskolen i samfundet-almene pædagogiske synspunkter, Klim (Denmark, Aarhus), 2012
Author(s)	段畑, 実生
Citation	年報人間科学. 2022, 43, p. 89-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86461
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Leo Komischke-Konnerup, *Efterskolen i samfundet-almene pædagogiske synspunkter*, Klim (Denmark, Aarhus), 2012

段畑　実生

1．はじめに

デンマークにはエフタスコーレ(Efterskole)（以下ES）という私立の教育機関がある。デンマークの義務教育は、就学前学級の0学年から9学年までであるが、若者個人の選択でさらに1年延長可能な10学年制があり、ESは8～10学年（14～18歳）の生徒を対象としている。ESの特徴は、生徒と教員が共同生活を行うこと、また、数学等の教科科目以外にもアートやスポーツ等の専門科目が充実しており、個人の興味に合わせて授業を選択できることである。国内の241校に3万1,745名が在籍し、生徒数は近年増加傾向にある(Efterskoleforeningen 2021)。ESでは特に10学年の生徒の割合が多い。10学年の教育の選択肢としてES以外にも、地方自治体の運営する若者学校(Ungdomsskole)や職業訓練校における10学年クラス等、複数存在する。ESはそれらの中で最も人気があり、義務教育から後期中等教育への移行期にある若者にとって重要な選択肢となっている。

一方デンマークでは、国際競争力の高まりや少子高齢化による労働力不足を受け、教育政策はより効率性と生産性を求める方向へと転換しつつある。これにより、ESに代表される個人のペースを尊重する「ゆっくりした育ち」（谷他 2010：72）にも変化が迫られている。実際に近年政治の議論では、ESの社会的意義に疑問を呈する声が挙がっているという（本書：11）。

本書では、こうした変化の中で、ESの果たすべき社会的役割や課題について論じられている。本書のタイトル“*Efterskolen i samfundet-almene pædagogiske synspunkter*”は、デンマーク語で「社会のなかのエフタスコーレ：包括的な教育的視点から」という意味である。社会構造の変化を受け、ESは若者自身・親・ES間だけではなく、社会全体で考えるべき存在となっている。これを背景に、主題は「社会との関係性におけるES」という視点を示している。また本書は、研究者やESの教員等、様々な立場の著者が執筆している。例えば、ある章では研究者による理論中心の議論、ある章ではESの教員による経験に基づく見解が述べられている。本稿では、本書で論じられるESの社会的役割に注目し、考察を加え、最後に日本の若者支援についても、若干ではあるが言及したい。

2．本書について

本書は全6章で構成されている。以下、各章の著者と概要について簡潔に述べる。第1章は、本書の編著者L.Komischke-Konnerupが執筆しており、本書の刊行時は南デンマーク研究センター(UC Syddanmark)に所属していた。本章では、ESと自由学校(Frie skoler)[2)]の違いについての検討がなされ、自由学校とは異なるESの側面（教育的・文化的・政治的側面）について分析されている。第2章は、Vesterlund ES校長のA.Nyhus Kirkが、競争社会における“カウンターカルチャー”としてのESの可能性を論じている。第3章は、南デンマーク大学(Syddansk Universitet)の教育学者J. Gleerupが、今日におけるESのマネジメントのあるべき姿を議論している。第4章については、次の3節で詳述する。第5章は、Bråskovgård ESの校長P. Damが、家庭と学校の役割が変化する中で、今日 ESが果たすべき役割について述べている。第6章は、オーフス大学(Aarhus Universitet)名誉教授Dietrich Bennerの講演の翻訳で、学校の有する一般的・専門的教育課題の関係性について論じられている。

3．若者の「社会的包摂の場」としてのES

本書第4章は、Brejning ES校長Jette Rasmussenが生徒の体験談と共に、現代社会におけるESの可能性について、特に社会的包摂の観点から論じている。Rasmussenは、世界経済がデンマーク経済、ひいては学校政策にも影響を及ぼしており、具体的には、「民主的人材」から競争社会で戦える「生産性の高い人材」の育成へと転化していることを指摘する（本書：99)。このようにグローバル化した社会における若者の現状について、社会学者Z. Bauman（1995）の「旅行者」と「放浪者」の概念を用い次のように述べる。「社会の大部分の若者は『旅行者』であり、あらゆる目的地を選ぶことのできる、人生の“旅行”に満足している。彼らは、世界を抗しがたいほど魅力的な場と捉えている。本グループと対極にあるのが『放浪者』である。多くの場合、彼らは社会の“最下位”からのスタートとなる。（中略）彼らの手の届く世界は、とてつもなく不親切である」（本書：99-100)。つまり、社会の流動化に伴い、「積極的な移動」が可能な若者と、「消極的な移動」を余儀なくされる若者の二極化が進んでいる。Rasmussenが勤務するESでは、「放浪者」のグループに属する若者（例えば、学力の問題、学校疲れ、心理的衰弱、ADHDのような発達障害、コミュニケーション障害、鬱病等を抱えるケース）が増えており、また、多くの若者が「自分は教育システムに不適合」と感じているという。実際デンマークでは、後期中等教育における若者のドロップアウトが社会問題となっている。

Rasmussen（本書：100）によると、自律して良い人生を送るには、自己肯定感と前向きで現実的な自己理解が必要であるが、競争社会ではテストや成績等が指標となるために、それらを育むことが困難になっている。一方、ESは「学校」と「共同生活」という二つの側面を有しており、学習(lære：learning)（＝知識を身につけること）と同様に、ただ存在すること／共にあること(være：being)（＝思慮深さを身につけること）にも重点が置かれているという。それゆえESでの経験は、若者の自己理解を変化させ、人

生の可能性を開くことが出来るとRasmussenは述べる。

具体的に本章では、ESの重要な要素として、1）生活における3つの側面（授業内外での学び・ガイダンス・規律）、2）異世代間の交流、3）様々なコミュニティの存在が挙げられている。1）は文字通り、ESには上記3つの側面があり、これらの相互作用がES独自の教育形態や生徒の成長につながっているという（本書：100）。2）に関して、流動化した社会において、進路の選択は実に多様かつ困難であり、諦めや責任転嫁を招き易い。そのため、若者の進路選択にまつわる関わりにおいて、異世代（特に親以外の大人）との交流は重要であるという（本書：102）。3）に関して、ESでは友人や同じ興味を有する者同士等、複数のコミュニティが形成されており、こうした異なる性質のコミュニティの相互作用によって、革新的な教育効果を生み出すことが可能であるという（本書：104）。本章には、これらの要素にまつわる3名の生徒の体験談が記されている。詳しい内容は割愛するが、いずれの生徒も元々家庭や他者とのコミュニケーションに問題を抱えていた。しかし、ESにおける教員との関わりやコミュニティへの所属を通して、彼ら彼女らは自尊心と自己理解を深め、自らの望む進路への進学を叶えることができた。

以上を根拠に、Rasmussenは「ESは、教育機関(Uddannelsesinstitution)であると同時に、人格形成の場(dannelsesinstitution[3])でもあり、特別で独創的な可能性を有している」（本書：105）と結論付ける。また、困難を抱える若者はしばしば『資源の乏しい(ressourcesvage)若者』と称されるが、実際は困難に立ち向かう強さと可能性に溢れた『資源の豊富な(ressourcestærke)若者』であるとし、その上でESの今後について、「私たちはESの革新的な教育方法によって、（しばしば“乏しい”と呼ばれるような）資源の豊富な若者の能力を、前向きな発達へと導いていかなければならない」（本書：105）と述べる。

4．考察

第4章では、「旅行者―放浪者」「資源の乏しい者―資源の豊富な者」という二項対立の表現が用いられた。これらは、平等原則に基づく普遍主義レジームに分類されるデンマークでも、若者の階層化が進行する様子を描写している。平塚（2007：68）は、「ノンフォーマルで福祉国家としての体系を豊かにもっていた国ほど、国境を越えて押し寄せてくる抗しがたい力を、強いインパクトと危機意識で感じ取っているのかもしれない」と述べる。本章では、このような情勢下で「放浪者」をすくい上げ、社会に包摂する役割を担うESの可能性が示された。以下、ESの特徴である「評価からの解放」と「コミュニティの提供」という二つの観点から考察を加える。

まず、「評価からの解放」について述べる。前述の通り、競争社会では“勝者”を可視化するために一律の評価基準が設定され、これらに当てはまらない者は“敗者”として社会から周辺化される。先進諸国では、ドロップアウトをはじめ様々な若者問題が噴出しているが、これは「制度的教育の機能不全」（平塚2007：69）ともいえる。一方、Rasmussenの「ESは教育機関であり、人格形成の場でもある」という表現にみるように、ESでは教育制度が規定する画一的な物差しで若者を評価するのではなく、個々の人間的な成長に重きを置いている。つまり、ESは制度的教育とは異なる価値基準で若者を捉える。こうした「評

価からの解放」が、現代の若者のニーズと合致しているのではないかと考える。

次に、「コミュニティの提供」に関して述べる。原文で「コミュニティ」は“fællesskab”と記されているが、これはデンマーク語で「何かにまつわる人々のグループ、またそれによって連帯を感じること」（Den Dansk Ordbog）を意味する。すなわち、物理的・心理的コミュニティの双方を指す。ESはその意味の通り、家庭でも制度的な学校でもない「ハードな」場であり、教員や仲間との連帯を感じられる「ソフトな」場でもある。南出（2012：127）によると、居場所やコミュニティは、若者支援の領域に限らず、当事者のエンパワメントにおいて欠かせないものとして、近年様々な分野で注目されているという。こうした「コミュニティの提供」は、ESを若者支援の文脈で考える上で重要な要素となりうる。

上記で述べた「人間的な成長」や「コミュニティ」を尊重する考えは、デンマークの伝統的な教育観に拠るが、グローバル化や新自由主義の波を受け衰退するのではなく、むしろ現代社会の綻びを繕うとして重要性を増している。ESは、社会システムに適応できないものを“敗者”として見放すのではなく、丁寧に救い上げ、社会に包摂する「セーフティネット」の機能を果たしているのではないだろうか。

5．おわりに－日本の若者支援を考える

2020年度、日本の小中学校における不登校者数、また、児童生徒の自殺者数が共に過去最多となった（文部科学省 2021）。未来ある若者の可能性が閉ざされ、時として生きる希望さえ失ってしまう、このような事態を招く社会のあり方を直ちに見直さなければならい。その他にも、貧困やひきこもり等、若者を取り巻く問題は深刻さを増しており、「若者個人の問題」へと収斂させるにはあまりにも無理がある。日本もデンマークも世界情勢の影響を同様に受けており、若者の二極化が多かれ少なかれ生じている。しかし、日本はデンマークに比べるとやり直しが利かず、「セカンドチャンスが保障されない社会」とも言えるのではないだろうか。一度教育や労働市場から離脱すると、その後の人生において複合的なリスクにさらされ、社会的排除を招く恐れがある。特に日本では、若者世代へのセーフティネットが脆弱である。

まずは若者が安心できる居場所を、そして、セカンドチャンスを整備することが重要である。近年日本でも居場所支援やユースワーク等、新たな若者支援の取組みが芽生え、広まりつつある。こうした動向からも、ESの意義について考えることは、日本の若者支援の発展にも寄与しうるのではないだろうか。

参考文献

[1] Bauman Zygmunt. 1998. *Globalization*. Cambridge Policy Press.

[2] Børne-og Undervisningsministeriet. 2020. *Elever I grundskolen 2019/20*.

[3] Den Danske Ordbog (https://ordnet.dk/ddo/ordbog?query=f%C3%A6llesskab, 2021.11.14 最終アクセス)

[4] Efterskoleforeningen. 2021. *Elev tal*.

[5] 平塚眞樹 . 2007.「日本と欧州もしくは英国の若者支援―その共有性と違いを考える」『教育科学研究会』57 巻 12

号 66-73.

[6] 南出吉祥 . 2012.「若者支援関連施策の動向と課題 :「若者自立・挑戦プラン」移行の 8 年間」『岐阜大学地域科学部研究報告』Vol.30 117-133.

[7] 文部科学省 . 2020.「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」

[8] Niels Buur Hansen, Christina Hvas Andersen, Leo Komischke-Konnerup, Alexsander von Oettingen. 2015. *Dannelse that works*.

[9] 谷雅泰、三浦浩喜、青木真理 . 2010.「デンマークの若者支援：若者へのインタビューその 2・エフタスコーレと HTX」『福島大学地域創造』第 21 巻 2 号 6623-6641.

注

1）毎年 9 学年を終えた約半数の生徒が 10 学年に進学する。その内、2020 年度は 10 学年全体の 56.9% が ES に進学した（Børne- og Undervisningsministeriet 2020）。

2）自由学校とは、デンマークにおける公立学校以外の私立（民間）の学校全般を指す。

3）Hansen et.al（2015：2）によるとデンマーク語で、“dannelse” とは、英語の “formation” の意であり、「バランスのとれた健全な個人を育成すること」を指す。直接的な訳語は存在しないが、“education” や “character formation” と英訳されることが多く、本文脈では後者の方が原文の意に近いとして採用した。